２０１２年春学期

KCJS ニュースレター

第二号

京都で着物

記事、写真：
メアリー・ロス
（コロンビア大学）

四年前に日本に来た時、浴衣を二回着たが、着物は一回も着なかった。だから、一月に日本に戻ってきた時、少なくとも一回は着物を着ると誓った。そして、先週の週末に着物を着る機会が来た。

日曜日は京都の「着物の日」だ。この日に着物を着ていたら、無料で電車やバスに乗れる。そして、マンガミュージアムで着物が借りられる。だから、着物を持っていない人（外国人とか…）も参加できる。

日曜日の朝、友達とマンガミュージアムへ行って、一番好きな着物を選ぶと、着付けの人が私に着物を着せてくれた。ある女の人が私がのどから手が出るほどほしかった着物をもうとってしまったけど、偶然にも着物を返したので、私は急いでその着物を掴んだ。そして、着物を着せてもらった後で、友達と平安神宮と祇園へ行った。

道を歩いている時、通行人は着物を着ているたくさんの外国人に色々な反応をした。ある人はびっくりし、ある人は写真を撮った。他の人は単刀直入に「きれい」「びっくりした」と言った。でも、反応は全部肯定的だったから、うれしかった。

着物の日は本当に楽しかったと思う。でもちょっと難しいことが一つだけあった。それは、着物を着て歩くことだ。

写真：「外人スマッシュ！」
パトリシア・マーティン
（ペンシルバニア大学）

今後の予定

CIP タレントショー

4/18　11 時半～12 時半

ところ：同志社大学
アーモスト館ゲストハウス
内容：合唱、弓道、太鼓、写真、ダンス、パルクールなど

修了式

4/26　11 時～14 時

ところ：同志社大学
アーモスト館ゲストハウス

京都はようやく春本番。今年は寒さが続き、例年よりかなり遅れての桜の開花となりました。こちらニュースレターの方もちょっと遅めの学期末に近くなっての発行となりましたが、待望の（？）第二号、どうぞお楽しみください。（KCJS ニュースレター編集部 西俣）

こちらもご覧ください！
KCJS CIP Blog （http://kcjs.jp/cip/blog/）

•このページは、京都市国際交流協会発行「Life In Kyoto」から引用

とうほく
がんばっぺ東北！

東北に起こった歴史的な大災害のほぼ10ヶ月後に、私はようやくボランティアとして、その状況を目にすることができました。はじめに宮城県の山元町の被害を見てショックを受けました。そこは津波が街中の家の中の物、あるいは家ごと全てを押し流してしまいました。同じように信じられないのは、大きなゴミの山が目の前に点々とあることでした。

私は、日本全国から集まった他のボランティアの人たちと一緒に働くことができました。彼らは地域が生活を取り戻すのを手伝うために2、3日から数ヶ月の間、自分たちの時間を捧げに来ていました。災害から1年が過ぎましたが、復興はゆっくりです。今年また被災地への支援が大きくなるといいと思います。

コロンビア大学　アーサー　デレク

やっぺす！いしのまき！！

お買いもので被災地支援をしませんか？

京都市国際交流会館 kokoka　1階受付カウンターで、宮城県石巻市の復興を応援するグッズを売っています。

ミサンガ＆クリアファイル＆ステッカー　500円

携帯ストラップ　500円

広島の冒険

ミシェル・マクアンドリューズ（ミシガン大学）

広島は想像したような町ではなくて、にぎやかできれいなところだった。路面電車があれば、歩ける広い歩道もたくさんあって、安心できるところだった。それだけではなく、どこでも海が見えるので、「広島」という名前の通りだ。一番好きなところは宮島で、神社やシカや紅葉饅頭などを見たが、弥山に登ったこともとてもよかった。

船で宮島に行く時に、海岸線に沿って店が並んでいるのが見えた。水の中に赤い神社が建っていて、宮島神社にはたくさんの人がいた。穏やかな風は静かで、ジャケットだけを着て島を歩いた。神社のところまで歩いた後で、友達が申しこんでくれた弥山に登ることになった。ロープウェイに乗るところに行くまでは舗装していない道路ばかりだ。景色がきれいで、湖を渡るためのかわいくて小さい橋があったが、あまり晴れていなかった。

四時ごろにロープウェイに乗った。高所恐怖症の私は乗るのがこわいだろうと思ったが、花が咲きそうな葉っぱを見たおかげでこわさを考えずに乗れた。坂の上に着いてからひと安心という感じが胸に宿ってきた。だがそこは本当は頂上ではなかったので、また他のロープウェイに乗らなければならず、ちょっと緊張してきた。次に着いたところこそ最後だと思ったが、そこからまた 20 分も歩かなければならなかった。

一所懸命登った。20 分から 30 分もかかる曲線のややこしい道を歩いた。登っている他の日本人が「がんばって」とか「お疲れ」とか言ってくれた。なんとかやっと頂上まで行ったら、落ちそうな建物があって、そこが頂上だった。そこから見ると水やむこうの島が霧のむこうに見えた。急に声や歌が聞こえてきて、それは帰りの通告だった。ちょっと気味悪い歌が流れるのを聞きながら早く戻って、山の上から下りた。

宮島に行ったのはいい経験だった。天気がよければまた行きたいと思う。まだ広島のお好み焼きを食べていないからだ。花が咲いた時はとてもきれいだろう。

↑写真：「タイタニック」
提供：メガン・ターリー
（ブラウン大学）

↓写真提供：パトリシア・マーティン
（ペンシルバニア大学）

伊勢旅行

僕のバス停

ジャクリーン・ウィー（ペンシルバニア大学）

僕は毎日バス停で待っている。晴れても、雨が降っても、そこにいる。平日でも週末でも休日でも、いつも同じ所に立っている。そして、いつも同じ人を見ている。朝、波のようにサラリーマンがどんどん来て、バスに乗って、仕事に行っている。顔が疲れているようだ。毎晩、遅くまで飲んだりしているからかな。昼間は、主婦が来ている。若くて、赤ちゃんを背負っている主婦をよく見る。中年ぐらいの人もよく見る。たまに高齢の人も見る。そして、二時間後、皆は買い物し終わって、バスでバス停に戻る。それから、帰る。中年の主婦はもう少し早い。若い主婦より経験があって、年寄りの主婦より動けるからだろう。小学生も来ている。五人ぐらいのグループで、皆は同じようなかばんを持って、同じようなぼうしをかぶっている。その子供達を見ると、僕の子供のころをを思い出す。その時は楽しかったな。でも、子供の時に戻りたいとは一度も考えたことがない。それより、僕の人生が先に進めばいいと思う。

色々な顔を見ることは確かに面白いが、一番気になるのは高校生だ。でも、それはそうだ。僕は高校生なのだから。高校生で一番早く来る人は眠そうな野球部の男子高校生だ。朝練がつらそうだ。次は三人の女子高生だ。ちょっと大きすぎる声で最近のうわさについて話している。次は男子高校生五人だ。元気に冗談を言ったり、美人の同級生について話したりしている。青春を楽しんでいるみたいだ。ちょっとうらやましいな。次はまじめそうな男子高校生だ。頭がいつも教科書に埋もれている。名門校に入りたがっていると思う。次はきれいな女子高生だ。バスより二十分早く来て、ベンチに座って、静かに本を読んでいる。速く読めると思う。毎週のように、新しい本を持っている。しかも、いつも僕が好きな本だ。実は、僕はこの子が好きだ。しとやかに歩いている姿を見た途端、呼吸することが難しくなる。そして、胸がざわめく。背は高くもなく低くもない。髪は肩の下まで伸びていて、真っ黒だ。でも、晴れている時、光でつやが出て、ぴかぴかする。本当に美しい髪だと思う。征服はいつもきれいで、しわがない。そして、お年寄りが来て、バス停が込んでいたら、必ずベンチの席を譲る。めずらしく親切な人だと思う。時々その子に声をかけたいと思うけど、いくら好きだって、声がなかなか出ない。でも、何かを言っても、聞こえないだろう。何かの関係がのどから手が出るほど欲しいけど、無理だから、止めたほうがいいと自分に言っている。

その女子高生の後は僕の親友ともう一人の友達だ。最近、その二人は仲良さそうだ。ちょっとさびしいが、いいことだと思うから、そんなに構わない。二人で笑ったりする時、僕も一緒に笑いたい。でも、だまって見ているだけにしている。バスに乗る前、親友は必ず僕の方を向いて、頭を少し下げてくれる。そして、時々花を持って来て、僕の足のそばに置いてくれる。それから、バスに乗る。僕はいつもうしろに付いていきたいと思っているが、立っている所から動けない。バスに乗れない。僕はもう死んでいるのだ。

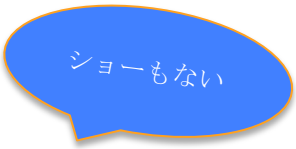
写真モデル：ネイト・スラトー　／　写真撮影：西俣貴幸

京ことばを学んで

ルーシャ・カーヴァー（ハーバード大学）

日本語の授業の中で、京都人によって書かれた京ことばに関する本を読んだが、一番印象に残ったのは、その本の筆者の説明より、KCJS オフィスのショアさんの個人的な経験に基づいた説明だった。

本の中では読者の関心を得るために、筆者が真実を少し粉飾したというか分析すぎたのではないかと思う。それとは対照的に、ショアさんには美辞麗句抜きで自分が経験した知る限りをわかりやすく説明していただいた。



その中で特に役に立ったのはショアさんがどのように「はんなり」という言葉を理解しているかである。本の中では「はんなり」は「粋」に似ていて、使い人自身も粋でなければならず、使うこと自体が難しいとあった。一方、ショアさんによると「はんなり」は色について使うことが多く、色の出方がはっきりしないパステル調のものに使う。

この違いを考えると、二人とも京都で生まれ育っても、いわゆる京ことばの意味を同じように理解するわけではないことが明らかになる。この差を例として取り上げると、人間は個人としてどのように周囲から理解を得るか、どのようにして言葉に意味を与えるかという深い疑問が浮かび上がる。

定義だけは足りない。自分の経験を踏まえ、周囲が社会的システムとしてどのように機能するか、つまり文脈の意味を理解できることが、言語の表現機能には必要なのである。

私の隠れ処・・・「あたごや」

エミリー・カマラータ（ボストン大学）

私は毎週二回ターリーさんとガムさんと一緒に京都武道センターに行きます。練習が終わった時はちょっと遅くて、ちょっと寒いですから、京都武道センターの近くのうどんやで食べてみたいと思っていて、二月の中旬ぐらいに初めて行きました。うどんがおいしいし、店員もやさしいし、とてもいいレストランだと思います。

そのレストランは同志社大学から行きやすいところにあります。同志社大学の正門を出て、今出川通りの市バス乗り場に行きます（四条高倉行きの市バス）。そこで、２０１の市バスに乗って、くまの神社前のバス停でおります（六つめぐらい）。市バスをおりた後で、三分ぐらい歩きます。丸太町通りを左の方に行きます（熊野神社の方の反対です）。二つ目の通りを右折すると、私のお勧めのレストランが右にあります。「あたごや」と言います。「あたごや」の名前は愛宕山からきたそうです。外にメニューがあって、ドアのところにのれんがあります。

中に入るとバーに似ている部屋があります。カウンターの席が十二席あります。最初に行った時から私たちは「あたごや」はそれだけだと思っていましたが、実は大きいレストランです。最初の部屋の隣に小道があります。この小道はお手洗いに通じている上に後ろの部屋にも通じています。たたみがありますので、後ろの部屋に入るために、靴を脱がなくちゃいけません。後ろの部屋はすごくきれいだと思います。たくさん絵があるし、あみどもあるし、きれいな座布団もあります。中庭さえあります！伝統的な感じがします。中庭の隣に特別な部屋もあります。その部屋に、こたつもあります。後ろの部屋で三十人が食べられますから、そのレストランで少くても四十人ぐらい食べられます。

「あたごや」は去年の十一月三日に開店しました。その時三人が働いていました（オーナーと店員が二人です）。今も同じ三人が働いています。一人のアルバイトも居ます。オーナーは二人の店員の料理の先生でしたから、この三人はレストランを開店しました。みんなはとてもやさしい人だと思います。ふつうのメニューがちょっと分かりにくいから、写真があるメニューをみせて、お勧めを教えてくれました。

「あたごや」の食べ物は全部うどんですが、とてもおいしいうどんです。「あたごや」のうどんは「手打うどん」です。その意味は、このレストランには自家製麺があるということです（キッチンで麺を作ります）。「あたごや」の麺の方が他のレストランの麺よりほそいです。他のものもを注文できます。うどんを注文する時に、うどんとお汁粉をもらえます。八百円ぐらいです。ほうじ茶の飲み放題もあります。アルコールが飲みたい時は酒とビールも注文できます。

「あたごや」のえい業時間は午前十一時から午後八時までですけど、午後三時から五時まで、店員の休みです。一番忙しい時間は十二時から一時までです。でも、日によってちょっと違います。私はよく六時ぐらいに行きますがその時間は、私(時々ターリーさんとガムさん)しかいません。それで、よく店員と話します。最初に行った時に私たちは二時間以上話していました。とても楽しかったです。ある日、店員が関西弁を教えてくれました。今店員は私を知っていますから、いつも敬語にかわり「はる」を使います。もっと親しい感じがするから、友達になりました。

私のお勧めのレストランにもちろん「あたごや」を選びました。サービスがいいし、うどんがおいしいし、きれいですから。食べ物はたかすぎませんから、これからもそこで食べたいです。皆さん、食べに行きましょうか？

KYOTO CONSORTIUM
FOR JAPANESE STUDIES
京都アメリカ大学コンソーシアム

ニュースレター、プログラムに関するお問い合わせは、tn2230@columbia.edu（西俣）まで。